
仮面ライダーディジェンド 世界の統治者

ディジェンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディジェンド 世界の統治者

【Nコード】

N4789M

【作者名】

ディジェンド

【あらすじ】

門矢士が廻った世界とは違う世界…

この世界は十の世界が消滅せず完全に融合してしまった世界である…
そこでは融合してしまった副作用で倒した筈の怪人までもが復活してしまった…

又してもその融合を促していたのが大ショッカーの元締めハイパーショッカーだった!?

1つの世界に集められた十人のライダーとその仲間達、そして新たに生まれたライダー!?

彼らに残された道はあるのか……

世界の融合（前書き）

初投稿になります。

何分、国語力が全く無いので表現力不足だとは思いますが宜しくお願ひします。

世界の融合

ある日並行して存在する世界、パラレルワールドで11人の仮面ライダーと各世界特有の怪人が誕生しました。

そしてライダーも怪人もいないこの世界で、一人の科学者がパラレルワールドの存在を知ってしまったのです…

その科学者は研究を重ね遂に世界を超える力を手に入れました。

その力を使い科学者は11の世界を廻り11人のライダーと怪人達に付いても研究を行いました。

そしてある1つの法則を見つけました。

並行世界には必ず同じ人間が存在し運命が連動してるという事、自分の分身が死ねば自分自身も死んでしまうという事…

運命の連動性を怖れた科学者は全ての世界を1つにしようと試みました。

そしてその試みに目を付けたがあの大ショッカーでした…

大ショッカーは研究に協力する代わりにライダー討伐の為のシステムを作らせました。

それが

ディケイドライダー

ディエンドライダー

ディセイブライダー

です。

そして大ショッカーの協力もありその装置は完成し遂に世界を融合させてしまいました。

しかしその反動のせいで似ているが全く別の11の世界が生まれてしまいました。

その世界を廻ったのがディケイドとディエンドである…

世界の破壊を否定した科学者は大ショッカーの真意、世界征服の野望に付いて知る、そして自分の犯してしまった罪の重さを知り組織からの脱退を申し出る…

組織から終われる身となった科学者は逃亡中に新たなるドライバーを開発し適合者を探した。

世界ではライダーと怪人達の抗争は激しくなるばかり…

大ショッカーが怪人達を纏め上げより強力な組織となりライダー達は徐々に圧されて行った…

その抗争に巻き込まれ科学者は命を落とし、ドライバーは大ショッカーに見つかることなく、近くの山に紛れてしまいました。

世界の融合（後書き）

最後まで読んで頂いた方ありがとうございます。
次話から主人公登場となります。

誤字脱字はあるかと思いますが、読みやすいようにこれからも精進します。

平和の崩壊（前書き）

性懲りもなく二話め投稿です。

遂に主人公が登場です。

皆さんが知ってるあの二人も登場させてしまいました。

では、宜しくお願いします。

平和の崩壊

とある街…

とある裏山…

少年が一人…

木にもたれて黄昏ていた…

「俺の名前は、麻宮雅貴。風都大付属高校に通うしがない高校生さ
… 平和だったこの街に最近不審な事件が起きるようになった、
これも（パシッ）イッテエエ…」

いきなり少女が頭を叩く！！

「なあに、一人でナレーションしてるのよ」

「夏帆ッ！！ 何でお前がここに居るんだ！！ 学校はどうした
学校は！？ こんな所でサボってんじや（パシッ）だからイッテエッ
て！！」

この少女は幼なじみの黒東夏帆

「明日から学校は夏休み！！　だから学校は終業式だけで終わりなの」　雅貴は学校来ないから分からないんでしょ！！」

「夏休み！？　まだ7月入ったばかりだぜ？？」

雅貴は飛び起きて驚く！？

「最近、失踪事件増えてるでしょ！？　それが学校付近でも起きたんだって。それで自宅待機を兼ねて夏休みだってさ…」

夏帆は不安そうな顔をする…

「何ビビってんだよ！？　夏帆らしくもない！！」

「だってえ…　失踪事件の跡って怪物が出るって噂だし…
流石に怪物には……………」

雅貴は夏帆に歩み寄りポンッと肩を叩く

「バカじゃねえの！？　そんなの出るわけないだろ！！　は
はぁーん、さては一人で帰るのが怖くて俺を迎えに来たな！？」

「違いますう！！　人がせっかく心配して見に来て上げたのに、

何よその態度!？」

夏帆は雅貴に歩み寄る

「一体俺の何を心配するってんだよ!？」

雅貴はちよつと引き気味に言う…

「雅貴最近元氣無いじゃない… 学校も急に来なくなっちゃうし… いろいろあるのは分かるけど…」

「俺の家族の事か…」

夏帆は頷き、下を向く

「だって… 侑希くんとお父さんの事だってあるし… 時期も同じだよね…」

「何が言いたい…」

雅貴も同じく下を向く

「侑希君とお父さんもその怪物達に襲われたんじゃないかって…」

お父さんも普通の死に方じゃないってニュースやってたよ!?!?
侑希君はまだ見つかってないみたいだし…」

雅貴は沈黙する…

夏帆は続ける

「本当は雅貴も何かおかしいと思ってるんじゃない!? ここだ
ってお父さんが見つかった場所でしょ… あれから毎日ここに来
てるし… 何かを探してみたいに…」

「それは…」

ガサガサッ

その時林の中で何かが動いた!!

「キャッ!?!」

「誰だ?!?!」

林の中から2つの人影が現れた：

「私達だよー！！　　何ビツクリしてんのようー？？」

「さては何かいやらしい事でもしてんでしょ？？」

現れた二人組は雅貴達に喋り掛ける：

「何だあー　クイーンとエリザベスかあ…　　突然ビツクリさせないでよね！！」

「何だとはなによー　　こんな所でコソコソしちゃってさあー」

……やたらとブリツコで喋る少女……

「うーん……　　ちよつとね！！」

返答に困る夏帆……

「そんな事より、お前達は何でこんな所に来てんだよ??」

話しに割り込む…

「私達はあゝ「私達は、あなたを探しに来たのよ!!」 麻宮雅貴
君」 もうゝクゝイゝゝン!! 私に喋ってるのにゝ!!」

エリザベスの喋りにクイーンが割り込む…

「ハッ!?! 何でお前達が俺を?? 今日ホントによくモテる
な…」

パシッ!!!!

夏帆が雅貴に突っ込む!!!!

「勘違いしないでよ、バカ!!!!」

「私達は、知り合いの探偵に頼まれたのよ!!」 麻宮恭介の息子
である、あなたをね!!!!」

クイーンが訳を話す

「どこのどいつだよ!?! その探偵って??? あの研究バカな

親子を知ってるなんて!? しかも俺に何の用がある」

「あなたも知ってるでしょ　この街風都の探偵ってあそこしかないじゃん」

「だから知らねえって!!　なあ知ってるか、夏帆??」

「私も知らない…」

「エ　　ウソ」

「そんな事はいいのよ、エリザベス!!」

「だってえ　翔チャンの事知らないんだよ!!」

「さっさと訳を聞かせろ!!!」

雅貴が痺れを切らす：

「この街に鳴海探偵事務所って言う探偵事務所があるの!!　その左翔太郎って探偵に頼まれたのよ!!　何の用かは知らないケド、あなたのお父さんの事は知ってるみたいだったわ…」

「鳴海…?? 左…?? やっぱり、俺は知らないぞ探偵事務所!?!」

雅貴は信じようとはしない

「まあいいわ!! 付いてくれば分かるから!!」

クイーンとエリザベスは歩き出す!!!

「エッ!? ちょっと待ってよ!!!! どうするのよ雅貴?!!」

「仕方ない… 行ってみるか…」

二人も歩きだす!!

ガサッ!!
ガサガサッ!!

「何よ!? 今度は誰よ!?!」

慌てる夏帆・クイーン・エリザベス

ガサガサガサガサッ！！！！

「違う！！　人間じゃない……」
構える雅貴……

「じゃあなんなのよ」

「泣いてる場合じゃ無いでしょ！！」

エリザベスをなだめるクイーン……

「静かにしろ！！　俺達は……　囲まれている………」

平和の崩壊（後書き）

どうでしたか…

文に纏まりが無いのは自分でも良く分かって居ます…

少しずつ勉強して行きますのでこれからも宜しくお願いします。

仮面の戦士（前書き）

第三話投稿です。

仮面の戦士

「人間じゃないって…　じゃあいったい何に囲まれているのよ？」

「そんなもん俺が知るか…」

怯える夏帆と状況が掴めない雅貴…

「ドーパント…」

「だったら翔チャン達呼ばないと!!」

クイーンが眩き、エリザベスがメールを打つ

「翔チャンお願い早く来て!!」

「何だよ？　ドーパントって…」

「雅貴君、ドーパントも知らないの!？」

エリザベスが首を傾げる

「それは後で説明するわ。今は逃げるのよ!」

クイーンが囁き、林の切れ目を指指す！

「行こう、クイーン」

クイーンに目で合図を送り、困惑する二人を見る…

「仕方がない… 良く分からないが取りあえず逃げる方が良さそうだな！」

「そうね…」

二人も決意を固める

「みんな、行くよ！！」

クイーンの合図で、一斉に走り出す！！

その時！！！！

「シャヤヤッ!!」

四体の黒い影が飛び出す!

「「「キャッ!?!」」」

三人の少女が振り向き様に叫ぶ。

「ウワッ!? なんだなんだ?
りみたいなのは?」

あの白と黒のデッカイゴキブ

これには流石の雅貴も驚く。

「アイツらがドーパントなの!?!」

夏帆がクイーンに訪ねる。

「多分そうだと思う…」

「多分ってなんだよ?

お前ら知ってるんじゃないのか?」

雅貴が突っ込む。

「私達だってそんなに詳しいわけじゃないのよ…」

「クソッ!? いったいどうすりゃ良いんだよ…」

ひたすらに逃げる四人。

♪♪♪♪♪

携帯の着うたが鳴り響く。

「誰だよ!?! こんな忙しい時に!?!」

「アッ!? 翔チャンからだ!」

雅貴の苦情をよそにエリザベスが電話に出る。

「もしもし、翔チャン? 今どこよう? お願いだから早く来て!?!」

電話の向こう

「落ち着け、エリザベス! まだ学校の裏山か? だったら学

校で打ち合おう!!」

「うん、わかった」

「俺達が何とかするから、心配すんな!!」

ブチッ

プープープー

「アッ………。切られた。」

翔チャン、なんだって?」

不安そうに聞くクイーン

「学校で落ち合おう。俺が何とかするから心配するなって…」

「心配するなって… 俺達は今困ってるんだぜ…」

「もう!! 黙って走る!! 捕まっても知らないわよ!!」

文句ばっかりの雅貴にクイーンが渴を入れる。

「さあ後ちよつとだよ、みんな。」

学校が見えてくる

「シャヤヤツ!!」

一体の怪人が、前方の草村から飛び出す!

「チッ!? 後ちよっとって時に……………」

後図去りする4人。

「「「シャヤヤツ!!!!」」」

他の三匹も飛び出し完全に囲まれた。

「どうしよ…」

「どうしよって、私に聞かれたって…」

「雅貴!! あんた男でしょ!? 何とかしなさいよ!!」

「これは男も女も関係ないだろ…」

絶体絶命の四人…

「クソッ… 仕方ない、俺が囷になるからその隙にお前らは逃げ

ろ!!」

「何か作戦でもあるの?」

クイーンは雅貴を見つめる…

「あんな化け物相手に作戦なんかある訳ないだろ…」

「そんなの死に行くようなものじゃない!!」

「雅貴だけ見捨てて行けないよ!!」

夏帆とエリザベスも心配そうに見つめる…

「じゃあどうしろって言うんだよ… このままだと俺達四人共…
………」

その時!!!!

「ブーーン」

一台のバイクが飛び出す

ボコッ…

そのまま一体の怪人をぶっ飛ばす!!

「誰だ!?!」

雅貴はそのバイクに乗った人物に問い掛ける。

「待たせたな、クイーン・エリザベス! 俺が来たからにはもう
安心だ!?!」

バイクから降りたスーツスタイルの青年が言う…

「遅いよ、翔チャン!!」

エリザベスはその青年に抱き付く。

「ホントだよ…全く。」

クイーンもその青年の影に隠れる。

「だからそいつはいったい誰なんだよ!?!」

空気の読めない馬鹿が一名…

「俺の名前は左翔太郎。 私立探偵さ! 君が麻宮雅貴か?」

「それがどうした!?! 俺に何の用がある?」

（話しは後だ翔太郎、まずはあいつらを倒すのが先決だ。）

「分かったよ、連れないねえ相変わらず…
話しは後だ麻宮雅貴、まずはあいつらを倒す！！」

「ハア！？ 何独り言言ってやる…」

「下がってな！」

そう言うのと翔太郎は雅貴の前に出る。

「行くぜ、フィリップ！」

（ああ！）

翔太郎は腰にベルトを巻きUSBメモリのような物を構える。

（サイクロン）

「ジョーカー」

「変身」

叫ぶと共にベルトに緑色のメモリが現れ、それを差し込み更に翔太郎自身が持っていた黒のメモリも差し込み、バツクルを開く！！

「サイクロン」

「ジョーカー」

音声と共に竜巻が翔太郎を包み弾けると共に姿が変わる。

「「さあ、お前らの罪を数えろ！」」

姿を表したのは、右半身が黒く左半身が緑の仮面ライダー。
仮面ライダーW サイクロンジョーカーである。

「変身しやがった…」

雅貴は啞然とする。

「フィリップ、どうだあいつらは？」

左目が光る。

「アイツらもどうやらドーパントでは無さそうだ…」

今度は右目が光る。

「またかよ、じゃあ遠慮なく倒させて貰うか!!」

言うが速いか怪人達に殴りかかる。

「オラッ」

まず正面の敵を殴り飛ばす。
そして両サイドの敵を蹴りつける。

ガシッ

もう一体の敵に後ろから羽交い締められる。
残りの三体もジワジワ近づいて行く。

「クソッ… 離せこのやろう！」

前方から近づいて来た怪物の体を駆け上がり、羽交い絞めを振り払い、そいつの後方へ宙返りをする。

「翔太郎、メモリチェンジだ一気に行くよ！」

「分かったぜ相棒！」

バックルの二本メモリを引き抜き、新たに青と黄色のメモリを差し込みバックルを開く。

《ルナ》《トリガー》

体の色も青と黄色に変わる。

Wは《ルナ・トリガー》にフォームチェンジした。

「さあ、一気に決めるぜ！！！」

Wは左胸に現れたトリガーマグナムを怪人目掛けて乱射する。

無数の弾丸が放たれ、怪人達は逃げ惑う…。
しかし追尾効果のある弾丸は怪人達を追い詰め、次々にヒットさせて行き、ある程度の距離が開く。

「今だ、翔太郎。」

「分かった。」

バックルから青のメモリを引き抜き、トリガーマグナムに差し込む。

《トリガー・マキシマムドライブ》

「これでも喰らいな!!」

「「トリガー・フルバースト!!」」

銃口に溜まったエネルギーを一気に放つ。

怪人達に逃げ場は無く見事に命中し、三体??の怪人達は崩れ落ちるように消滅した。

「フッ…決まったぜ。」

「まだまだ翔太郎、一体逃している…」

「何ッ!?!」

Wは周りを見渡す。

「クソッ…ドコへ行きやがった。」

「マジかよ!?!」

雅貴達も周りを見渡す。

「アレッ!? 夏帆は!?!? 夏帆はドコへ行った!?!?」

「ホントだ…夏帆チャンがいない」
もう一度周りを見渡す一同、やはり周りには何の気配もない…

「チッ… 夏帆どこだっ!?!?」

叫ぶやいなや一目散に走り出す雅貴。

「アッ!? チョットう…」

「翔ちゃんどうしよ… 雅貴までどっか行っちゃったよう…」

雅貴の行き先を見つめるクイーンと、行き先を指差し翔太郎の手を引く張るエリザベス。

「心配すんな、この街は俺の庭だ! その庭で誰一人なかせやしない!?!?」

「相変わらずだねえ、翔太郎は…」

そういうとバックルから二本のメモリを引き抜き、変身を解除する。

「さてと…」

翔太郎はポケットからデジカメのような物を出して、またもやメモリを差し込む。

《バット》

デジカメが蝙蝠のような物に変形する。

「アイツも一人にはしておけないからな、頼むぜ！」

すると蝙蝠は雅貴が走って行った方に飛んで行く。

そして翔太郎は二人のいる方に振り向く。

「クイーン・エリザベス、お前達は安全な所に非難しといてくれ、この先で亜希子が待ってる、後亜希子と合ったら照井に電話して保護して貰えるように頼んで貰いな！」

「うん…分かった。」

「翔チャン、二人を頼んだよ！！！」

「ああ、後はプロに任せな！！！」

クイーンとエリザベスは学校方面に、翔太郎は森の中へと走り出す。

仮面の戦士（後書き）

戦闘シーン書いてみました。

表現力不足ですみません：

戦士の目覚め(前書き)

第四話です!!

戦士の目覚め

その頃夏帆は…

(ここドコ…私何してんだろ……………雅貴……………????)

「キャアアアアッ!？」

(どうしよ…私捕まっちゃった…)

夏帆は周りを見渡すが自分と怪人しかいない事に愕然とする…

「雅貴ッ!! 助けてえ!!」

(聞こえないか…誰もいないし、臭いし気持ち悪いし最悪…どうしよ……………)

夏帆は恐怖心の中必死に考えたが結局何も思い付かなかった…

(こうなったらもうやけだわ…これでも喰らいなさい!!)

夏帆は渾身の右ストレートを怪人の顎を目掛けて放つ!!

ボスッ

一瞬ぐらつく怪人、何とかその隙に腕を振り払う夏帆…

(何とか解放されたけどこれからどうしよう…………アレッ!? こっ…こっ…!!?)

そこは自分達がさっきまでいた所であつた…

（ここって…雅貴がいつもいる所だね…結構もどっちゃったみたいだし…どうすれば…）

怪人は徐々に夏帆へと歩み寄る。

夏帆も逃げ場無く後ずさりする。

ドンッ

とうとう後ろの木にぶつかってしまい、完全に逃げ場を失い、夏帆は絶望する。

（どうしよ…お願い、雅貴助けて…）

「シャヤヤツ!!」

怪人が夏帆に殴りかかろうとした瞬間…

ピカンッ

夏帆の足下の地面が光り、何かの衝撃波で怪人は吹っ飛ばされる。

（何この光りは…!?!?）

夏帆は光る地面を見つめる…

怪人はまたも怪人に近寄ろうとするが、今度はバリアのような物に阻まれ近づけない…

（この下に何があるんだろう??!?）

夏帆は地面を掘り始める。

怪人は夏帆に近寄ろうとするがバリアの力で一向に進めない。

すると…

「夏帆ッ！！ どこだ?? 居たら返事しろッ！！」

雅貴の声が近付いてくる。

（雅貴の声！？ 助けに来てくれたんだ… でも、今雅貴が来たら、私はこのバリアに守られてるけど今度は雅貴が危ない…）

「雅貴ッ！！ 来ちゃダメ、私は大丈夫だから逃げて！！」

夏帆は必死に叫ぶ。

「夏帆！？ 居るのか??」

バサバサバサ

林を掻き分けて、雅貴が顔を出す。

「夏帆ッ！？ 大丈夫か、怪我はないか??」

「馬鹿ッ… 来るなって行っただでしょ…」

その言葉で雅貴も怪人の存在に気付く…

「オイ、何してる早く逃げるぞ！！」

雅貴はバリアをすり抜け夏帆の腕を掴む。

「ウソッ… バリアをすり抜けられたの!？」

夏帆は自分に近付けた事に驚く。

「何言ってるんだお前は、とうとう頭でもおかしくなったのか、ホラ行くぞ!」

もう一度腕を引っ張る。

「チョット待ってよ!! でもあいつは私に近寄れないんだよ!」

夏帆は怪人を指差し喋る。

「マジかよ!?! てか何でだよ?!!」

「私にだってわかんないよ… この木の下が急に光り出して、そしたらバリアみたいな物が出てあいつをぶっ飛ばしちゃったの!!!」

夏帆はまた地面を掘り出す。

「その下に何があんだよ!?!」

「もう、うるさい!!!」

夏帆はひたすら穴を掘り、雅貴はそれを見つめる…

ガサガサッ

またもや林が揺れる…

「今度は何だよ…」

そしてまた同じ怪人達が出て来た、しかし今度はバリアを囲み込む程の大群で…

「クソッ…囲まれた。」

夏帆も異変に気付き掘るのを止める。

「何なのよ、この数は…」

そして雅貴は思った…

(俺に……俺にも力があれば……力が欲しい……俺はどうな
ったっていい……せめて夏帆を……夏帆を守れるだけの力が！
！！)

ピカアアアンッ！！！！

よりいっそうに輝きます、そして地面から何かが飛び出す…

「今度は何だよ！！！！」

飛び出した光の固まりが更に輝き周りが見えなくなる…
そして更に敵を吹き飛ばした。

更にその光は雅貴の周りを飛び、腰に納まる。

「ベルトになった!？」

「大丈夫、雅貴!？」

突如現れたベルトの黒いバックルから一枚のカードが飛び出し、雅貴はそれをキャッチした。

「今度はカードか!？」

雅貴はカードの絵柄を見る。

そこには仮面の戦士の絵柄と《ディジェンド》と書かれた文字。

(俺はコイツを知ってる……?)

「雅貴!! アイツらまた来るよ!!」

「心配するな…お前は俺が守ってやる……多分な……」

「多分って……」

「来いよローチ共、今度はこっちの番だ!!」

(何でだ…さっきまで知らなかったアイツらが今では分かる………
まあいい取り敢えずやってみるか………)

雅貴はカードを相手に向け、叫ぶ!

「変身!!」

そしてカードをバックルに差し込み、両サイドのハンドルを押し込む！

《カメンライド・ディジェンド》

左右前後いろんな方向に十体の虚像が飛び出し、その全てが雅貴と重なる。

そして数枚のプレートの用な物が頭に突き刺さる。

そしてその瞬間体にも色が入る。

基本カラーは黒でシルバーのボディライン、赤い目に紫のポインタ―である。

「これが俺の力…」

「雅貴……だよね……!?!」

「ああ、もう心配はいらない安心して見てろ!?!」

ディジェンドへと姿を変えた雅貴は、ベルトの横のホルダーから一枚のカードを取り出し、バックルに装填する。

《アタックライド・エンドシューター》

バックルの中央からポンプアクション式の銃が飛び出し、ディジェンドの手に納まる。

「さっきは良くも追い回してくれたな!?!」

囲んでいる敵を追い払うように乱射する

ババババアアアアッ

「コイツで最後だ!!」

またホルダーからカードを取り出し、今度はエンドシューターに装填する。

《アタックライド》

そして空に向かって放つ!

《ブラスト》

空に上がった弾丸が花火のように弾け、全て敵に向かって飛んでいく……

「お前らの罪を、あの世で懺悔しな!!」

言い終わると同時にローチ達は銃弾の雨を浴び消滅し、ディージェンドはバツクルを開き変身を解除する。

「凄いよ、雅貴……大丈夫なの……?」

「ああ、なんともな………」

バタッ………

「雅貴………雅貴!」
「どうしたの、大丈夫………ねえ、雅貴!」

戦士の目覚め（後書き）

とうとうオリジナルキャラ出してしまいました。

毎回好き勝手に書いてしまってますがこれからも宜しく願います。

戦士の使命（前書き）

第五話です。

戦士の使命

ここは何も無い真っ白な世界……

そこに男が一人……

「う……ここはどこだ……俺は……俺は一体……ウンッ
!？」 夏帆ッ……夏帆はッ!？」

「そんなに慌てるな、ここはベルトがお前に見せているイメージだ。」

どこからともなく白衣の男が現れる……

「お前は……麻宮恭介か!? お前とベルトに何の関係がある
??」

ゆっくり立ち上がる。

「いきなりお前呼ばわりか実の父親を、雅貴……しかしお前がベルトの適合者だったとわな……」

男も歩み寄る……

「じゃあお前が示そうとしたものはこれのことだったのか??」

懐からディジェンドライバーを取り出し、男の方に突き出す。

「そうだ……そのディジェンドライバーは私が作った。そしてこの世界に混乱引き起こしたのもこの私だ……」

「さっきのローチ達もお前のせいだっているのか??」

「私は長年に渡ってパラレルワールドに付いて研究していた……」

「その研究とローチ共となんの関係がある!!」

雅貴は恭介の襟を掴む。

「人の話しは最後まで聞け、お前は何も進歩しないな……」

恭介は雅貴腕を振り払う。

「パラレルワールド、同時に並行して存在する世界、それがパラレルワールドだ。そして私は研究を重ね、遂に世界を渡る力を手に入れ、世界を廻った。そこで俺は特別な世界を見つけた。」

あたり一面が真っ暗になり、頭上に11の太陽系が現れる。
それを見上げる雅貴。

「何だよこれは??」

「これが異変が起こる前の世界の状態だ。決して交わる事の無いはずだった、しかし私が世界を廻った事によってその均衡が崩された」

「ちょっと待てよ!!
お前が見つけた特別な世界ってのはどんな世界だったんだよ!??」

「お前がさっき戦ったような怪人と仮面ライダーと言う戦士が存在する世界だ、俺は11の世界を廻り、それぞれの世界のライダーと怪人達に付いて研究しながら廻っていた、しかしそれとは別に二つ

の事に気付いた、各世界には必ず同一人物が存在してそれぞれの運命が連動していると言う事と：「ちょっと待て運命の連動ってどう言う事だよ!？」

「簡単に言うと生と死の連動、生まれるタイミングと死ぬタイミングと言う事だ。」

「ならどっかの世界の俺が死ねば、全ての世界の俺が死ぬって事か??？」

「ああ、そしてもう一つは私が犯した大きなミスだ。私が世界を廻る事によって世界の均衡が崩れ世界が消滅に向かったんだ。」

頭上に浮かんだ、11の太陽系がお互いに引かれ合う。

「これは!？」

「これが世界の消滅だ…。引かれ合った星は一つに融合しいずれ消滅する運命にあった……。」「

11の太陽系が完全に一つになる…。

「でも世界は消滅していない……。」「

「世界の消滅と運命の連動性に恐怖を感じ、この世界を軸に11の世界は完全に融合させ、それを消滅から守る為にそのドライバーを作ったんだ。」

雅貴はドライバーを見つめる……。

「でも何でお前が殺されたんだよ?」

「私は世界を廻っている時にある組織と出会った、その組織も世界を廻る力を持っていて、奴らの廻った世界も融合により消滅したらしい。」

「その組織にやられたのか？ どんな組織何だ？」

「さっきのような怪人達を引き連れた集団、ハイパーショッカーだ」

「ネーミングセンスがないな……その組織と何かあったのか??」

「ショッカーは私の研究に目を付け、今まで廻って来た世界の記憶と研究のバックアップを提供する代わりに仲間になって組織に協力するようにいつて来た。その協力と言うのがライダー討伐用のドライバーの製作だ……。私は勿論断った……が、奴らは侑希を人質にとって脅して来た。」

「侑希はまだ生きているのか!？」

「それは分からない……。私は奴らに協力し、ディジェンドライバー以外に3つのドライバーを作った。ディケイドライバー・ディエンドライバー・ディセイブドライバーだ。」

今度は3つのドライバーが浮かび上がる。
その内の二つには雅貴も見覚えがあった。

「おい、それって……!？」

「その通りだ、お前の持つディジェンドライバーはこの3つを基に作ったのだから……。ディジェンドライバーが完成し、世界が完全融合した。しかしそこでまた一つ問題が起こった、融合の反動で似ているが全く違う世界が誕生し更にこの世界との融合が始まった。」

その世界を破壊し再生させる為にディケイドとディエンドとハイパーショッカーの幹部達が向かっている、そしてその隙に私はディージェンドライバーを悪用させない為に逃げ出した。」

「で、その途中で殺されたってか……!?!? ザまらないな。」

「お前は这个世界を統べる存在だ、世界をこれ以上奴らの好きにさせてはいけない。お前にならそれができる。まずはライダー達を集めるんだ。」

「そんな大それた事俺に出来る訳無いだろ!!!」

「時間切れみたいだな……じゃあまたな………。」

恭介は消えてしまう。

戦士の使命（後書き）

今回は二人しか出ませんでした。

会話ばかりでまた読みずらくなってたかもしれません……。

まだまだですがこれから宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4789m/>

仮面ライダーディジェンド 世界の統治者

2010年10月11日03時02分発行